

宝林宝樹 (6)

日が暮れてお堂の扉を閉めるため、本堂に入るとフツとお香の香りに包まれます。昼間に本堂で法要を勤めた時は、残り香が強く残っており、お香の香りで身体がスツと軽くなると同時に自分ではわからなかったイライラした気持ちが感じられたり、心が何となくささくれているなあ…と自分自身の心のありように気づかされます。お香は、心身を清らかにし、忙しい時に心を和ませるなどの効用があるのと同時に、わけへだてなく届く仏さまのおこころを表すといわれています。

人は日常的なおいに順応して、そのにおいを感じにくくなるそうです。年齢とともに体臭が強くなっても、自身のおいにはなかなか自分では気が付けないのと同じように、自分の心のありようには自分で気付くことは難しいものです。イライラした気持ちやささくれた心だけでなく、人を貶めたり、妬んだり、怒りの心、欲の心、自分中心の心等々、それぞれにおいがついていたらならば、どんなキツイにおいを発しているのだろうか、そしてそのにおいに気づかず毎日常生活をしているのだろうか、恥ずかしくなります。

仏さまのお心にであうことにより、自身のありように気づかされる、爽やかな香りに教えられました。

